

いま求められる 先物取引の機能 流動性のある市場を

一橋大学客員教授 宇佐美 洋

宇佐美
洋



どうなった 「牡牛と熊の闘う像」

9月11日の夜、私も多くの人と同様に、同時多発テロを報ずるテレビの緊急ニュース画面を驚がくしながらみていました。崩壊して白い土煙を上げる世界貿易センタービルをみながら、不思議な非現実感のなかでも「これは大変なことになった」とウォール街で働く友人、知人の安否を尋ねまわりました。

多くの犠牲者の行方や身元がいまだに判明しないし、搜索および瓦解したビルの撤去には、まだ1年はかかるだろうとのこと。このような歴史的悲劇を前にして、あまりにもささいなことなので、いささか書くのをはばかるのですが、実は、事件をテレビで目撃

して以来、私の心にずっと引っかかっていて、その行方がいまだに確認できないものがあります。それは、有名な「牡牛と熊の闘う像」のことです。映像から判断する限り、どうも、この像もがれきの下に埋まってしまっているようです。

東京のオープンを評価

世界貿易センタービルの横の広場であって、この有名なブロンズ像は、先行きの価格上昇に賭ける強気筋（英語でブル「牡牛」の意味）と、先行きの価格下落に賭ける弱気筋（英語でベア「熊」）が互いにぶつかり合う相場を象徴しています。これは、まさにウォール街の入り口を象徴するモニュメントになっています。牡牛は闘う時に角を「下から上に突き上げる」ので、価格上昇の強気を象徴し、熊は両手を「上から下に振り下ろす」ことから、価格下落を体現するのだ、という説明を受けたことがあります。

私は、ニューヨークに立ち寄るたびに、必ずこの像に触れることを習慣にしていました。ツキを授けてくれるように祈ることで、この



原油上場記念パーティーであいさつする堺屋太一氏

像を個人的なニューヨークの「道祖神」のようにみなしていました。時には、手提げに入っていた日本から持参の酒をこの像にかけたこともありました。

事件当日、米国の先物市場は一時閉鎖されました。世界は、事件の経済的インパクトを探るために、固唾^{かたず}を飲んで一斉に、いまからオープンする東京市場の動向を注視しました。事件の2日前に上場した東京の原油先物市場も注目的になりましたが、結果的には、全限月ストップ高で張りついてしまい、高いもわずかしかできませんでした。わずか2日間でこのような大事件のインパクトを吸収するだけの流動性ある市場ができると考える方が、ないものねだりでしょうし、むしろ、東京市場がこのような状況下で閉鎖せずオープンした、という事実を評価すべきでしょう。

まず価格形成機能を

しかし、「いま求められる先物取引の機能とは何か？」という問いに対する、今回の事件の教訓は明らかです。つまり、今回のような世界を揺るがす事件に対しても、その経済的インパクトを価格形成で評価できるだけの流動性のある先物取引市場が日本に求められています。ヘッジおよび投機といった先物取引の機能を論ずる前提として、まず、価格形成機能が働かなくては話になりません。

時間を追って地球をめぐる先物取引の循環が十全に機能し、東京がその一環としての役割を果たすには、「牡牛と熊の像」ががれきから再び姿を現すまでの1年間は、極めて重要な分岐点になるように思われます。